

陳舜臣さんを語る会通信

NO.146 Dec. 2025

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2025年12月20日

定本のつもりで作成した『陳舜臣さんと神戸を歩こう』

今、『陳舜臣さんと神戸を歩こう』（以下、新版と略称）の出版を準備しています。と言って本気で販売しようなどとは考えておりません。

新版作成意図 ① 先に作成した『陳舜臣さんと神戸を歩こう』（以下、旧版と略称）は陳舜臣入門講座のテキストとして作成し、冊子だけの販売はしませんでした。ところが、冊子だけほしいという要望があり、これに応えるということで、ページを少し増やし、製本も無線綴じにして作成した次第です。

② 陳舜臣さん（1924.2.18～2015.1.21）は、昨年、生誕100年を迎えました。また、今年は没後10年の節目の年でした。これらの機会をとらえ、私たちは神戸華僑歴史博物館、孫文記念館ほかで、特別展や入門講座など、いくつもの行事を開催してきました。その時に作った多くの資料が埋もれてしまうには忍びなく、これらの総括として残しておきたいという思いがあります。

新版内容(旧版と比べて)			
	ページ他	ページ見出し	備考
改作	表紙	このページに掲載	
	2	生誕100年、没後10年行事の総括として作成	本号〈2〉
追加	9	「三色の家」の頃の懐かしい記憶 弁天浜、国産浜、臨港線	本号〈3〉
	10	戦時中、疎開先垂水の浜辺で後の奥さまとデート	本号〈4〉
	11	陳舜臣さんにとって「幻想の田舎」 生田神社	143〈3〉
	20	「国立移民収容所」(現在の「海外移住と文化の交流センター」)	147〈1〉
	21	山本通り(異人館通り)界限	145〈4〉
	23	保存された異人館 ハッサム邸とハンター邸	147〈2〉
	24	有馬温泉 短編推理小説『蟬が鳴く』	145〈2〉
	25	布引の滝とモラエス	147〈3〉
	32	陳舜臣さんと神戸関帝廟	147〈4〉
	39	まずこんな作品から読んでみよう!	144〈4〉
	40	宝塚歌劇と陳舜臣さんの縁	143〈4〉
	41	こころの友、一番の理解者 司馬遼太郎	144〈2〉
修正	34	陳舜臣さんが再度山に登ったのは太子の森ルート	省略
	38	おすすめコース例(浜の手コース)	省略

旧版はA5版44ページ、中綴じで、新版はA5版56ページ、無線綴じです。
※左の表、備考欄は、該当ページに掲載している「陳舜臣さんを語る会通信」の号及びページです。



新版表紙



旧版表紙

陳舜臣さんと神戸を歩こう

生誕100年、没後10年行事の総括として作成
陳舜臣作品も電子書籍で読む時代

陳舜臣さん（1924.2.18～2015.1.21）は、一昨年、生誕100年を迎えました。また、昨年は没後10年の節目の年でした。

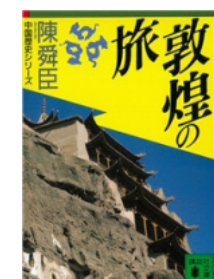
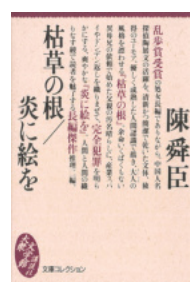
これらの機会をとらえ、私たちは神戸華僑歴史博物館、孫文記念館ほかで、特別展や入門講座など、いくつもの行事を開催しました。その時に作った多くの資料が埋もれてしまうには忍びなく、ここに、冊子『陳舜臣さんと神戸を歩こう』を作成した次第です。

ところで、1994年8月、脳内出血で倒れられてからは寡作だったこともあり、「陳舜臣さんって誰？」と問い返される昨今、書店で陳舜臣作品を探すことは難しくなっているのは寂しいことです。

一方、陳舜臣ファンにとって明るい話題もあります。それは、ほとんどの公立図書館が電子書籍化された陳舜臣作品の貸し出しを行っていることです。そして、その作品も、中国歴史ものの大作から、推理小説の中短編に到るまで、充実しつつあります。

電子書籍を刊行している出版社を見ると、大手の講談社などから、中小業者まで多彩です。

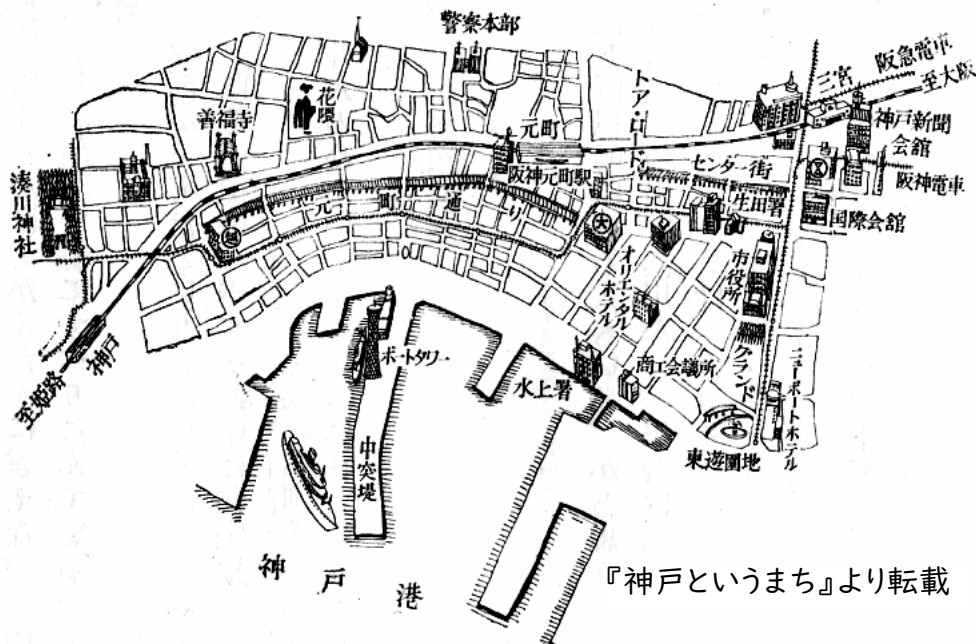
そして刊行されている作品は、『小説十八史略』『秘本三国志』『阿片戦争』『諸葛孔明』など中国歴史ものの大作、『枯草の根/炎に絵を』『三色の家』などの推理小説、『孔雀の道』『夢ざめの坂』『相思青花』などの好評一般小説から、『荊軻、一片の心』『囚人の斧』『九雷溪』『新港の若者』などの中短編、そして『神戸わがふるさと』『敦煌の旅』などのエッセイまで、100を超えます。



上述、マスメディアの近況と併せ、『陳舜臣さんと神戸を歩こう』は微力ですが、陳舜臣ファン・読者の増えることを願っています。

2026年1月

5 「三色の家」の頃の懐かしい記憶 弁天浜、国産浜、臨港線



『神戸というまち』より転載

『神戸というまち』『あの町この町』

弁天浜は中突堤の西にある荷役場で、ここで貿易貨物を船に積んだりおろしたりする。そんな場所はほかにいくらかもあるが、この弁天浜の労務者は、だいたいフリーのようだ。事情はよくわからないが、ひよっとすると港湾労務を支配している各組の縄張りの境界線にあるのか、緩衝地帯のようになっている、組も手を付けられないのかも知れない。

『三本松伝説』『港育ち』

昭和八年から終戦の年まで、私は神戸市の海岸通五丁目に住んでいた。家は大通りに面していて、そのさきはもう海であった。西は弁天浜、東は中突堤だが、私たちが住んでいるあいだに、正面の海も埋立てられてしまった。現在の国産浜である。

『三本松伝説』『惚れアンコ』

私が中学生で、受験準備をしていたころだから、昭和十四、五年のころ、海岸通のおこう側の埋立てがはじまった。突堤への引込み線、通称『臨港線』のレールのむこうは、すぐ海であったが、そこに荷役のできる波止場をつくろうというのである。

この埋立地は、のちに『国産浜』と呼ばれた。そこで荷役をする企業の名称であるうか。

海であったころ、町名などなかったのとはとうぜんだが、埋立てられたあと、地図で見ると、『波止場町』という、きわめてありふれた名称がついている。だが、私たちはそんな名で呼んだことはない。由来などには頓着なしに、『国産浜』とよんでいた。

『六甲随筆』『「どなり屋」、鉄道守る気』

空襲で焼失するまで、私たちは神戸の海岸通五丁目に住んでいた。目の前の海岸本通のおこうは、貨物専用の臨港線の鉄道が走っている。一日に何回しか通らない超過疎ダイヤで、ふだんはそこを列車が通ることなど忘れていた。だから通るときは、やたらに汽笛を鳴らした。海のそばとはいえ、

まちなかを走るのだから、超スロースピードであり、事故がおこった記憶はない。
— 駆けっこしても、おれ勝つぞ。
小学生からそんなことを言われるほど、ゆっくりした速度であった。



機関車の前に、「どなり屋」と呼ばれる人が、メガホンをもって、線路に子供たちがが入っていると、「こら！ あぶないぞ！」どこの学校の子や？」と、どなっていた。私たちはそれを見て、「あのおっさん、熱うないのかな？」「それより、ふりおとされたらどないするんや？」と、心配したものだ。

※文中、傍線は加筆

■右の画像は、神戸新聞写真部編『目で見るひょうご一〇〇年』より転載。キャプションに、「神戸港の各突堤と湊川貨物駅を結ぶ臨港線。外国船をバックに、のどかな鐘を鳴らして走る8620形。昭和34年撮影」とある。陳さんの小学生の頃のような「どなり屋」はもういなかったよう。

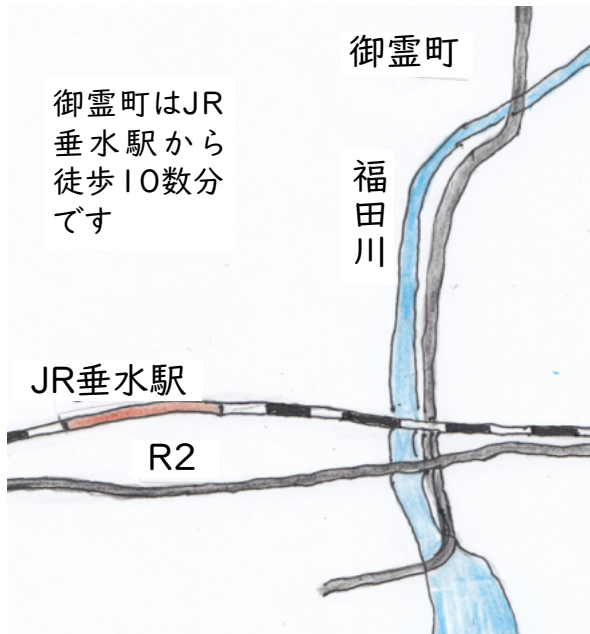
6 戦時中、疎開先垂水の浜辺で後の奥さまとデート

『青雲の軸』より抜粋引用
ページは集英社文庫版による

『青雲の軸』は、受験雑誌『螢雪時代』の一九七〇年一〇月号〜七一年三月号および七一年一〇月号〜七二年三月号に連載されました。自伝小説ですが、フィクションは非常に少ないと思います。集英社『陳舜臣中国ライブラリー』に収録されています。

三月十六日の夜半、空襲警報のサイレンが鳴った。俊仁は警報をきくと同時に、北野町の家の一階のベランダに出た。大空襲である。(p.223)

この空襲にも北野町の家は焼けのこったが海岸通りの家は全焼した。そして、俊仁の一家は垂水の御霊町(ごりようちょう)の福田川にそった一軒家に引っ越した。



続けて引用します。

このころ俊仁は、北野町の家を共同で借りていた蔡家の娘と仲良くなった。彼女の家の奥に疎開していた。俊仁の家からそれほど遠くない。しぜん、顔をあわせたり、言葉をかわす機会が多くなった。

動乱の時代の若者は、たえず心が乱れる。男も女もそうである。

蔡家の娘もなにかにすがりたいという、心の傾斜をもっていたのだ。彼女の母親は、そのときかなり重い病気に罹っていた。戦時中のことで、良い薬も不足がちで、じゅうぶんな手当がでできないことを悩んでいた。戦争にとざされた前途にも、彼女は不安をもっていた。

「ぼくらは一人一人が、自分で自分を強くするほかはない」

相談を受けた俊仁は、そう答えた。「そうね。…」

と、彼女はすなおにうなずいた。こんなときはすなおであったが、デートの場所をきめるときなどは、彼女は頑固であった。

俊仁は山が好きだったのに、彼女は海のほうが好きであった。けっきょく、二人は海辺を散歩するほうが多かったのである。うす暗い夕闇の浜辺を、二人で歩いていて俊仁は漁船をつないでいる綱によく足をひっつけた。

どうやら心はそこになかったようだ。(この人をしあわせにしなければならぬ) それだけが、人生の目的のように思えた。

(p.235-236)

戦時下の青春、それは「黄金時代といえるだろう」

上八時代はそのときは苦しみの多い日々だとかんじていたが、今思い返してみれば、やはりたのしいことのほうが多かったようだ。なによりも可能性の多い、青春の日々であった。空襲、終戦というクライマックスを持った黄金時代といえるだろう。

(『道半ば』p.111)

■戦時下の暗い時代ではあったが、上八(上本町八丁目)での学生生活・研究所生活、のちの奥様蔡錦墩さんとの垂水の浜辺での語らい、それはまた、陳舜臣さんにとって、青春時代でもあったのです。



陳舜臣さんがデートした垂水の浜のイメージです。現在の垂水漁港では、コンクリート造りの埠頭と突堤で区切られた水域に漁船が繫留されています。砂浜に引き揚げられた漁船が並んでいたかつての浜辺の風景は今はない。